

## 加賀友禅 毎田染画工芸

### 創業90年の加賀友禅工房に Wacom One 液晶ペンタブレット13を導入 伝統的な技法をデジタルで再現

#### 加賀友禅 毎田染画工芸

毎田染画工芸は、1932年に石川県金沢市に創業、400年続く加賀友禅の伝統を三代にわたって受け継ぐ老舗の工房です。加賀友禅には13～15の工程があり、古来より分業が一般的ですが、毎田染画工芸では図案作成から彩色、仕立てに至るまでの全工程を工房内で一貫制作しています。現在は父・毎田健治さんと三代目・毎田仁嗣さんが共同で経営を行い、10名の職人が在職。時代、空気、感性といったものを読み取り、新しい意匠や様々な分野での友禅のあり方を模索し、きものと現代文化の新しい融合を図っています。

[www.maida-yuzen.com](http://www.maida-yuzen.com)

#### 伝統工芸とデジタルの融合を模索

江戸時代中期、京都で人気を博した扇絵師「宮崎友禅齋」のデザインと、加賀御国染と呼ばれる繊細な模様染が融合して確立した加賀友禅。「加賀五彩」と呼ばれる藍・藤脂・黄土・草・古代紫を基調とした色合いや、写実的に描かれる草花をモチーフとした絵画調の様子が特徴で、葉が虫に食われた様子を描き込む「虫喰い」、図柄に立体感を生み出す「先ぼかし」などの技法が使われます。加賀友禅のきもの制作は現在でも全て手作業で行われ、絵柄も手描きで作成されています。仕上げに金箔や刺繍などの加飾がほどこされる京友禅とは異なり、職人の熟練の染技法のみで、美しく繊細な自然美を描き出します。

毎田染画工芸の三代目である毎田仁嗣さんは、加賀友禅作家として活躍する一方、同工房における全工程のディレクションを行なっています。中学の頃からパソコンに興味を持ち、大学時代では建築学科でCADを扱ったり、Adobe Photoshopで絵を描いたりしていました。それもあって、大学卒業後に家業に就いたときには、図案をトレースしてパソコン上で色のバリエーションを試してみるなど、早くからデジタルの活用を始めていました。

「最初はマウスで線を描いていたのですが、もう少し手描き感というか、筆圧を生かしたようなトレースはできないものかと思っていたところ、ワコムのFAVOという小さなペンタブレットを見つけてすぐに購入しました。それがワコム製品との最初の出会いですね」

加賀友禅のきもの絵柄は、まず原寸大の紙に図案を描き、その上に仮仕立てした白生地を重ね、「青花」と呼ばれる露草の花の汁を用いて模様を写し取ります。こうした手作業を基本とする仕事の中で、毎田染画工芸はどのようにデジタルを取り入れるようになったのでしょうか。



## 伝統工芸とデジタルの融合を模索

毎田染画工芸は、加賀友禅という伝統工芸を「古いもの」ではなく「現在へ続くファッションの積み重ね」と考えています。三代にわたって守り続けてきた伝統の技を用いながら、加賀友禅のエッセンスを洋装、商品パッケージ、建築装飾など、きもの以外のさまざまな創作物に落とし込む挑戦を続けています。

また、加賀友禅のきものは、結婚式やパーティーなど晴れの日に用いられることが多く、昨今のコロナ禍の影響で需要が大幅に減っている中、事業を継続、発展させていくためにはきもの以外の用途を伸ばしていくことが必須の課題となっていました。

こうしたきもの以外の創作物を制作するのに、デジタル技術が大いに貢献していると毎田さんは話します。

「私どもは最近、大型スキャナーを導入し、過去100年間保管されていた紙の図案のデータ化に取り組みました。データ化された図案は検索・閲覧がしやすく、きもの以外の商品への展開も容易に行えます。アーカイブから素早くデザインの作成、提案ができて、商品化までのリードタイムも非常に短くなり、きものと違って大量生産となる商品にはとても有用な手段だと言えます」

現在では、スカーフやアクセサリ、名刺入れなど、自社商品の開発・販売も行っており、コロナ禍で発売したマスクは累計販売数が2万枚を超える人気商品となりました。

## 伝統工芸とデジタルの融合を模索

加賀友禅では、彩色の前に「糊置き」という工程があります。もち米の粉を蒸して作った糊を紙の筒に入れて先金から絞り出し、下絵の線に沿って細く糊を引いていきます。「糸目糊」と呼ばれ、次工程でさす染料がにじみ出さないよう防波堤の役割を果たします。

「糊置きは、手の絞り加減で線の太さを調整するため、熟練の技術が求められる工程です。加賀友禅特有のぼかしやグラデーションの美しさは、この糊置きの良し悪しで決まると言っても過言ではありません。初めは細く入って少し太くもっていき、最後はすつと抜いていくような、そうした微妙な感覚をデジタルで再現するには、ペンの筆圧を生かした描画が重要になります」

同工房では、こうした手作業ならではのディテールをできる限りデジタルで再現したいという思いから、ワコムの液晶ペンタブレット Wacom One 液晶ペンタブレット13を導入しました。

「データ化された過去の図案を単に転用するだけでなく、今の時代に合わせたアレンジを加える際にも、加賀友禅ならではの風合いを損なわない表現を実現するうえで、Wacom Oneは欠かせないツールとなっています」

資料請求、ならびに製品に関するお問い合わせは、こちら

<https://tablet.wacom.co.jp/inquiry/biz-design-inq.php>



### 株式会社ワコム

〒160-6131 東京都新宿区西新宿8丁目17番1号 住友不動産新宿グランドタワー31階

電話でのお問い合わせ／資料請求は ☎ 0120-056-814 / Tel.03-5337-6704 受付時間 9:00～12:00/13:00～18:00 (土・日・祝日を除く)

© 2022 Wacom Co., Ltd. All rights reserved.

## デジタルが切り拓く、新たな創作の可能性

同工房の職人で、主にデジタルを使った図案の編集作業を行なっている増山瑞菜さんは、Wacom Oneの使い心地について次のように話します。

「以前使っていた板型のタブレットと比べて、液晶ペンタブレットは実際に描いている感覚により近いので、すごく使いやすいと感じました。トレース作業にしても実際に手元を見ながら描けるので、描き直しも少なくなり、以前より作業のスピードが上がったように思います」

増山さんは、専門学校で京友禅を学んだ経験があり、またデジタルの技術も同時に身につけたといいます。伝統工芸の技法を知ったうえで、デジタルデバイスでそれを実現する。まさに増山さんのような職人が、日本の伝統文化を次代へと継いでいく大切な人材であると、毎田さんは言います。

「今の若い世代は、いわゆるデジタルネイティブといわれていますが、最新の技術を使いこなすと同時に、昔からある伝統文化の良さや面白さ、技術なんかをもっと知ってもらいたい。それらがかけ合わさって、何か化学変化が起きて、そこから新しいクリエイションが生まれていくのではないかと思います」

毎田染画工芸のさらなる挑戦が、加賀友禅をもっと身近なものにし、より多くの人にその魅力が伝わることを期待します。

